

# 一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより

第67回

# 下野新聞社

発行部数日刊三十一万部を誇る下野新聞。その始まりは一八七八(明治十二)年六月一日に創刊された「栃木新聞」に遡る。発行所は栃木町(現栃木市)万町の万象堂。購読料一部一銭五厘、タプロイド判四頁、月八回の発行だった。社主は印刷業を営む万象堂の主人菅谷甚平が、編集人には新聞への志を持つ中田良夫が就いた。以後、中田は発行所の度重なる変遷にあつても、幹事、印刷長など一貫してその中心にあつた。

当時の栃木町には、県庁が置かれ、栃木師範学校をはじめ栃木女学校や栃木医学校が開設されるなど栃木県の県都として大いに栄えた。文字通り政治、経済、文化の中心だったと言つてよい。しかし、新聞経営は困難を極め、創刊後わずか五カ月で廃刊。最

終号は三十七号だった。

栃木県最初の新聞は、それに先立つこと一八七四(明治七)年四月五日に創刊された「栃木新誌」。発行は栃木町万町の報聞社で、本文十四頁の和綴じだった。定価は二銭五厘、編集人秋森克夫、印刷者磯野天朴とあり、木版刷であつたという。内容は太政官布告や栃木県達などの条文を掲載していた。しかし、同紙も経営が芳しくなくわずか半年、三十数号で廃刊となつた。明治七年当時の物価を見ると、上白米が十銭五厘二毛といふから、「栃木新誌」の購読料がいかに高額だったかがわかる。(「郷土史事典栃木県」新川武紀)

先に廃刊となつた「栃木新聞」に代わつて、翌七九年八月二日、田中正造を編集人として、共進社(栃木町旭町)より新たに「栃木新聞」(第二次栃木新聞)が発行された。発行は隔日刊で、購読料は一銭五厘。痛烈な政府批判により、発行停止が相次いだという。

一八八二(明治十五)年八月、「栃木新聞」(第三次栃木新聞)は「足利新報」と合併した。社名を旭香社と改め、社主に足利新報の木村勇三が就任。この木村とはのちに第四代木村半兵衛を襲名する織都足利を代表する実業家その人だった。九月八日に第一号を発行。木村退任後は、足利出身の影山禎太郎が経営の近代化を図つた。

一八八四(明治十七)年二月、旭香社は県庁の宇都宮移転に伴い、宇都宮にあつた下野旭新聞鶏鳴社(福嶋米司)と合併し、本社を池上町に移転。栃木新聞は計三百五号で休刊となつた。題号を「下野新聞」と変更、三月七日第一号が発行された。役員は影山をはじめ栃木新聞時代を継承。これが県紙「下野新聞」誕生の前史である。(「下野新聞百年史」下野新聞社)



明治30年代の下野新聞社本社社屋と兼庁舎、そして口元



「栃木新聞」の発行所があつた明治時代中期の、栃木町万町の街並み。絵葉書に栃木市とあるが、栃木市の市制施行は1937(昭和12)年